2024.11

事例から学ぶ

相談員のための トラブル対策 NEWS

入所後2カ月の事故を半減させた「入所初期生活対応」

■なぜ入所2ヶ月の事故が多いのか？

特養W苑では入所から2ヶ月以内の事故が大変多いことに問題意識を持ち、これらの事故防止に取り組みました。当初は入所後しばらくは集中的に見守りを行うなどして、介護職員が予測していない事故にも対応しようとしましたが、効果はありませんでした。そこで、入所2か月間の事故原因を分析し、これらの原因を改善してみようということになりました。事故分析から分かった入所後の事故の原因は、次のようなものでした。

「介護職員が利用者の生活動作など行動パターンを把握しておらず行動を予測しにくい」「生活環境が急激に変化し従来どおりの動作ができない。特に認知症の方は不穏になり事故になる」「家族との関係が希薄になり、他の入所者との人間関係もできず、生活意欲が低下し引きこもる」これらの3つの課題に分けて防止対策を講じて半年間取り組んだ結果、入所2ヶ月以内の事故を半減させることができました。どんなことに取り組んだのでしょうか？

事故防止の取り組みが利用者のQOL向上につながった

■利用者の生活行動を早めに把握する

お年寄りは危険な行動を敢えてしますが、人によって行動様式が異なります。その利用者が取りやすい危険行動の様式を早めに把握することで事故の防止につながります。

入所前の面談にユニットリーダーまたは居室担当が同行し、ベッドの昇り降りや移乗動作など実際に動作をよく見る。入所前が在宅であれば居室環境も把握してくる。
初日に利用者の生活動作と動作環境を、家族と担当職員でチェックする。極力従来の生活動作を尊重するが、自力動作などで明らかに危険な動作があれば、できるだけ改善を提案する。
入所1週間目に居室担当がシフトをはずれ、丸一日利用者に張り付いて生活動作を観察する。（出勤扱いだが、休暇のフリをして一日付き合う）

■生活環境の変化を最小限に

長年住み慣れた居宅から比べ、施設は生活環境があまりに違いすぎますし、広い生活空間は高齢者にとって安全とは言えません。居室環境を居宅に近い環境にすることで安定します。

家族にお願いをして、利用者の使い慣れた生活用具などを、できるだけたくさん居室に持ち込んでもらう。寝具なども愛着のあるものは優先的に継続使用する。
入所初日に、家族と一緒に部屋のレイアウトを考えていただく。従来の生活環境にできるだけ近い環境になるように、家族にお願いする。
生活環境の変化によって、転倒などの事故が起きやすくなることをご家族にご理解いただく。（「入所のしおり」の中で詳しく説明）

■家族との関係を継続し生活意欲を持続する

家族との関係を密に保つことで、生活意欲が向上し精神機能も高まり事故防止につながります。

入所初日は利用者と家族と居室担当で昼食を一緒に食べる。食事のメニューは本人の好物を厨房に特注する。同室になる利用者も可能であれば同席する。
各フロアの着信専用電話の電話番号を家族に伝え、1週目は毎日電話を入れてもらい、本人と話をしてもらう。特にお孫さんの電話は喜ぶので電話をかけてもらうようお願いする。
入所２ケ月間に２回ご家族を招いて利用者と食事会を行う。食事後は相談員が利用者と家族を乗せて、車で外出し公園などに散歩に出かける。できれば居室担当も同行する。
ケアワーカーと相談員で「入所のしおり」を作成し、入所後の生活を具体的に知ってもらい、生活への不安をなくすと共に、ご家族にご協力いただきたいことをお知らせする。

発行責任者
あいおいニッセイ同和損害保険株式会社
マーケット開発部　市場開発室
担当　森田・山口　TEL　050-3462-6444
監修　株式会社安全な介護　代表　山田　滋

担当課・支社　代理店
株式会社福祉医療共済会
東京都渋谷区渋谷3-12-22
TEL：03-5466-0881　https://www.fi-k.jp